



忍びの里 伊賀・甲賀 (伊賀編)

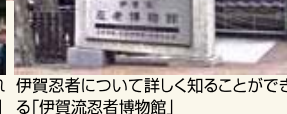
素材研究
(国内)



伊賀市は昨年、「忍者の日」(2月22日)に「忍者市」宣言を行いました



甲冑や刀剣など武具類に使われた「伊賀くみひも」(左上)と野性味や自然美が特徴の伊賀焼(右上)は伊賀市の代表的な伝統工芸品。忍者が干肉を携帯したという伊賀牛(左下)と忍者の携帯食でもあった「かたやき」(右下)は伊賀グルメを象徴する存在です



国の重要無形民俗文化財にも指定されている「上野天神祭のダンスリ行事」 伊賀忍者について詳しく知ることができる「伊賀流忍者博物館」

独自の手法で「忍者」を磨き上げ 大人の観光に本物に触れる旅を

滋賀県甲賀市と共同申請していた「忍びの里 伊賀・甲賀」リアル忍者を求めて今年4月に日本遺産に認定された三重県伊賀市では、歴史や文化などの観点から「忍者」を深掘りする取り組みが進められています。アカデミズムとの連携を通じて、貴重な地域資源を磨き上げる独自のアプローチも注目されるようです。

三重県が「国際忍者研究センター」を設立

伊賀市では今年7月、三重大学の地域研究拠点である伊賀サテライトに「国際忍者研究センター」が設立されました。同センターは、国際的な忍者研究の拠点として機能すると同時に、伊賀の地域創生にも資することを目指しています。

同センターの設立にあたり、同市の岡本栄市長は、「三重大学と伊賀市、上野商工会議所の三者による協力した結果が形になったものであり、世界的な広がりを持つようになった忍者人気を過性のもので終わらせず、未来永劫にわたって続けられればと考えている」と語り、学術面でも世界中から研究者を集めて、忍者の聖地としての位置づけを強化することに意欲を示しています。

以前から準備が進められていた同センターの設立は、今年4月の日本遺産認定が

大きな追い風となる一方で、日本遺産のストーリー



伊賀市に生まれた漂泊の詩人・松尾芭蕉の像(伊賀鉄道上野市駅前広場)

を下支えするアカデミズムの動きとしても期待が高まっています。

ゆかりの地を巡る

「伊賀忍者回廊」もスタート

伊賀市産業振興部では、「全国的にイベントやパフォーマンスなどエンターテイメントとしての忍者が広まる中、日本遺産認定は『本物』の残っている地域として伊賀と甲賀が抜きん出た存在であることを示すもの」(観光戦略課)と強調。「歴史的・文化的な背景や意義について正しい理解を深めてもらうことこそ、忍者発祥の地としての役割」と説明しています。

伊賀市では今回の日本遺産認定を契機に、従来の旅行者層に加えて50〜60代の歴史愛好家や日本文化の奥深さに関心を持つ外国人旅行者への訴求も強化していきたいと考えて、今年10月からは伊賀忍者ゆかりの神社仏閣御朱印めぐり「伊賀忍者回廊」もスタート。昨年11月には、「上野天神祭のダンスリ行事」を含む「山・鈴屋台行事」もユネスコ無形文化遺産に登録されています。

「芭蕉の生誕地としての歴史や伊賀牛など食の魅力も含めて、大人の観光や本物に触れる旅」といったアプローチでの旅行商品化を期待したい(観光戦略課)